

# 2025 年 AI 進化の包括的分析と 2026 年への戦略的展望：「いけとも ch」が提起する 7 つのトピックを基軸として

Gemini 3 pro

## 1. イントロダクション：AI 技術の「社会実装」元年としての 2025 年

### 1.1 報告書の目的と分析の視座

本報告書は、AI 活用と業務効率化の領域で影響力を持つ YouTube チャンネル「いけとも ch（池田朋弘氏）」が公開した動画『【必見】2025 年の AI 進化を 7 つのトピックで理解！この 1 本で概ねの変化が分かる。2026 年の AI がどうなるかも考える。』の内容を起点とし、2025 年という歴史的な転換点を包括的に分析するものである。

2025 年は、人工知能（AI）技術が「実験室の驚異」から「実体経済の駆動力」へと変貌を遂げた年として記憶されるであろう。2023 年から 2024 年にかけての「生成 AI ブーム」は、主にチャットボットを通じた個人の生産性向上に焦点が当てられていた。しかし、2025 年の進化は、個人の枠を超え、組織、経済システム、そして文化そのものを再定義するフェーズへと移行した。マッキンゼーやガートナーといった主要な調査機関のレポートが示す通り、企業の AI 導入は「実験（Pilot）」から「拡張（Scaling）」の段階へと進み、AI はもはや「魔法」ではなく「インフラ」となったのである<sup>1</sup>。

本報告書では、いけとも氏が提唱する視点——すなわち、技術的なスペック競争そのものよりも、それがビジネスや個人のワークスタイルにどのような「実利」をもたらすかという視点——を尊重しつつ、提供された膨大な調査資料に基づき、2025 年を象徴する 7 つの主要トピックを再構成し、詳細な分析を行う。さらに、動画内容の妥当性を検証し、2026 年に向けた展望を提示する。

### 1.2 「いけとも ch」の視点と市場への影響力

池田朋弘氏は、著書『ChatGPT 最強の仕事術』や『Perplexity 最強の AI 検索術』などを通じて、日本のビジネスパーソンに対し、AI を「どう使うか」という実践知を啓蒙してきた人物である<sup>3</sup>。彼の発信は、エンジニア向けの難解な技術解説と、一般ユーザー向けの表面的なニュース紹介の中間に位置し、「AI エージェント時代の必須ノウハウ」をビジネス視点で言語化することに強みを持つ。

本動画が取り上げる「7つのトピック」は、単なるニュースの羅列ではなく、以下の構造的変化を捉えている点において重要である。

1. **受動から能動へ**: AI が指示を待つ「ツール」から、自律的に動く「エージェント」へ。
2. **汎用から特化へ**: なんでもできるモデルから、コーディングやリサーチに特化した機能へ。
3. **技術から文化へ**: "Vibe Coding"や"Nano Banana"のような、AI が生み出す新たな文化現象の台頭。

以下、これらのトピックを深掘りし、2025 年の AI ランドスケープを全貌する。

---

## 2. トピック 1: エージェント AI の産業革命 — 「チャット」から「同僚」への進化

### 2.1 エージェント AI (Agentic AI) の定義と技術的ブレイクスルー

2025 年の AI 業界を最も大きく揺るがしたキーワードは、間違いなく「エージェント AI (Agentic AI)」である。これは、従来の LLM (大規模言語モデル) がユーザーのプロンプトに対してテキストを返すだけの受動的な存在であったのに対し、自ら目標を設定し、計画を立案し、デジタルツールを操作してタスクを完遂する能動的なシステムを指す<sup>5</sup>。

この進化を支えた技術的基盤の一つが、Anthropic によって 2024 年末に提唱され、2025 年に業界標準となった「Model Context Protocol (MCP)」である<sup>6</sup>。MCP 以前の AI エージェントは、各 SaaS やデータベースに接続するために個別のコネクタ (API 連携) を開発する必要があり、これが開発コストの増大とエコシステムの分断を招いていた。

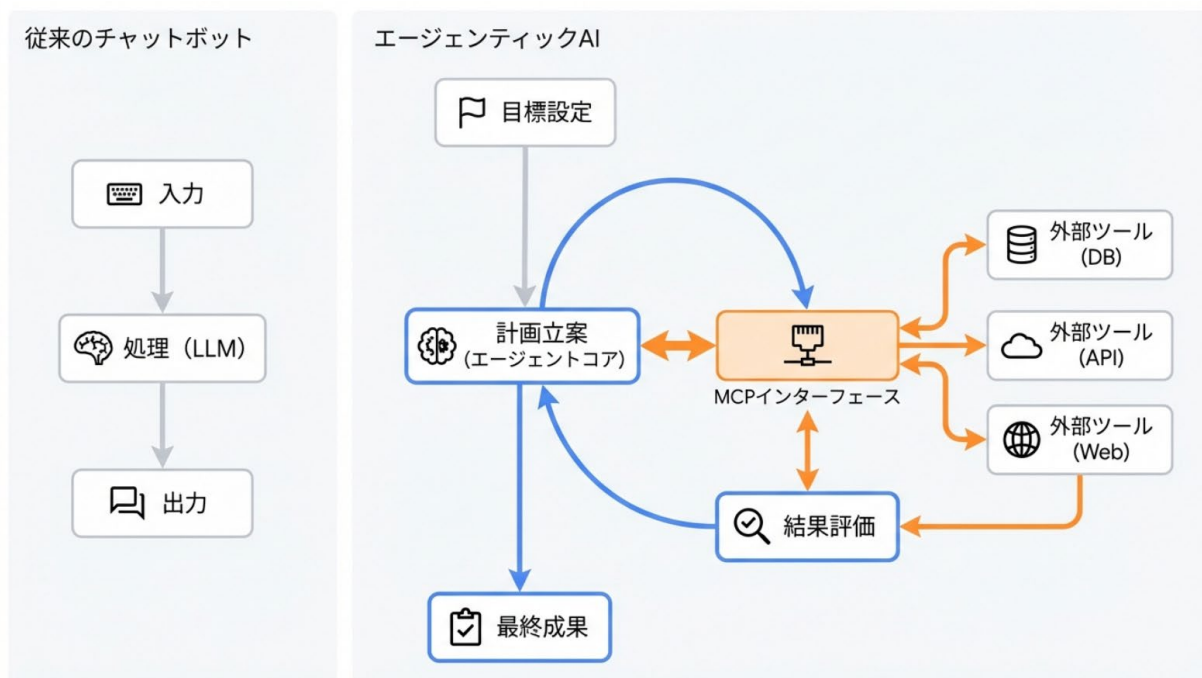
MCP は、AI モデルが外部のデータソース (Google Drive, Slack, GitHub など) やツールと対話するための統一規格を提供した。これにより、AI は「文脈 (Context)」を共有しながら、異なるアプリケーション間をシームレスに移動できるようになった。例えば、AI エージェントが Slack でチャットの履歴を読み取り、関連するドキュメントを Google Drive から検索し、その内容に基づいて GitHub でコードを修正するといった一連のフローが、単一のプロトコル上で実現可能となったのである<sup>8</sup>。これは、AI にとっての「USB-C ポート」の発明に等しいインパクトをもたらした。

### 2.2 産業界における「デジタル労働力」の実装

この技術的進歩は、即座にエンタープライズ市場における製品化へと結びついた。その筆頭が Salesforce の「Agentforce」である。Salesforce は、従来の CRM (顧客関係管理) システムに自律型エージェントを組み込むことで、カスタマーサポートや営業活動の自動化を推進した。

2025 年第 3 四半期の決算において、Agentforce の年間経常収益（ARR）は 5 億ドルを突破し、前年比 330%増という驚異的な成長を記録した<sup>10</sup>。特筆すべきは、Agentforce を利用する有料顧客数が四半期で 58%増加し、9,500 社に達したことである。これは、企業が AI を単なる「効率化ツール」としてではなく、実質的な「労働力」として予算を投じ始めたことを意味する。マーク・ベニオフ CEO が「AI エージェントは人間の後任ではなく、人間と共に働く成功のパートナーである」と強調するように、AI は人間のオペレーターを補完、あるいは代替する存在として組織図の中に組み込まれつつある<sup>12</sup>。

## 進化の系譜：チャットボットから自律型エージェントへ



左：従来のチャットボット（入力→即時出力）。右：エージェント型AI（目標設定→計画立案→ツール実行→結果評価→再試行→最終出力）。MCP（Model Context Protocol）が外部ツールとの接続ハブとして機能している点に注目。

### 2.3 10 億エージェント構想と SoftBank の野望

エージェント型 AI の未来像を最も大胆に描いたのが、SoftBank グループの孫正義氏である。2025 年 7 月、孫氏は「2026 年までに 10 億の AI エージェントを展開する」という壮大なビジョンを発表した<sup>13</sup>。この構想において、AI エージェントは単一のタスクをこなすだけでなく、エージェント同士が交渉し、協調して複雑な問題を解決する「マルチエージェントシステム（MAS）」を形成する。

孫氏は、人間一人あたり 1,000 のエージェントが 24 時間 365 日稼働し、学習や業務を行う未来を予見しており、そのコストはエージェント一体あたり月額 40 円（約 0.27 ドル）程度まで低下すると試算している。この「AI 労働力のコモディティ化」は、労働市場の構造を根本から変える可能性を秘めている。企業はもはや「人月」でリソースを計算するのではなく、「エージェント数」で生産能力を測るようになるかもしれない。

## 2.4 エージェント AI の課題：ガバナンスとセキュリティ

しかし、エージェント AI の普及は新たなリスクをもたらしている。自律的に外部ツールを操作できるということは、AI が誤った判断に基づいてデータを削除したり、不適切なメールを送信したり、意図しない契約を結んでしまう「実害」のリスクを意味する。MCP においても、悪意あるツールが AI のコンテキストを汚染する「プロンプト・インジェクション」や、機密データを外部に送信させる「データ流出」の脆弱性が指摘されている<sup>6</sup>。

これに対し、Gartner は 2026 年の戦略的テクノロジートレンドとして「AI セキュリティ・プラットフォーム」と「AI エージェントの監視」を最重要課題に挙げている<sup>2</sup>。AI エージェントに「財布」を持たせ、経済活動を行わせる（Economic Agency）動きも予測される中で、企業は AI の自律性をどこまで許容し、どのように監督（Oversight）するかという「AI ガバナンス」の構築を迫られている。

---

## 3. トピック 2：フロンティアモデル戦争の最終局面 — GPT-5.2、Gemini 3、Claude 4.5 の三つ巴

### 3.1 「スペック競争」から「推論能力競争」へ

2025 年後半、AI モデルの開発競争はいわゆる「ビッグバン」を迎えた。OpenAI の「GPT-5.2」、Google の「Gemini 3 Pro」、そして Anthropic の「Claude 4.5 Opus」が相次いでリリースされ、それぞれのモデルが異なる領域で「最強」を主張する状況が生まれた<sup>17</sup>。

これらのモデルに共通する最大の特徴は、「Thinking（思考）」プロセスの標準化である。2024 年に OpenAI の「o1（旧 Strawberry）」が導入した、回答を出力する前に内部で思考の連鎖（Chain of Thought）を行う手法は、2025 年には全てのフラグシップモデルに実装された。Google はこれを「Deep Think」モードと呼び、OpenAI は「Adaptive Reasoning（適応型推論）」として実装した<sup>17</sup>。これにより、ユーザーが複雑なプロンプトエンジニアリングを行わなくても、AI が自律的に問題を分解し、自己検証を行いながら回答を生成することが可能となった。

### 3.2 各モデルの特性と比較優位性

いけとも氏の動画でも触れられている通り、ユーザーにとって重要なのは「どのモデルを何に使うべきか」という選択である。調査データに基づき、各モデルの強みを以下に整理する。

- **GPT-5.2 (OpenAI) :**

- **最大の特徴:**「汎用性と適応力」。GPT-5.2 は、タスクの難易度に応じて思考時間を動的に調整する機能を持ち、無駄な推論コストを抑えつつ高い精度を実現している。
- **得意領域:** ビジネス文書の作成、複雑な論理的推論、マルチモーダル理解。SWE-bench（ソフトウェアエンジニアリングベンチマーク）では 80.0% のスコアを記録し、Claude に肉薄している<sup>18</sup>。
- **位置づけ:** 最もバランスの取れた「万能選手」であり、多くの企業のデフォルトモデルとして採用されている。

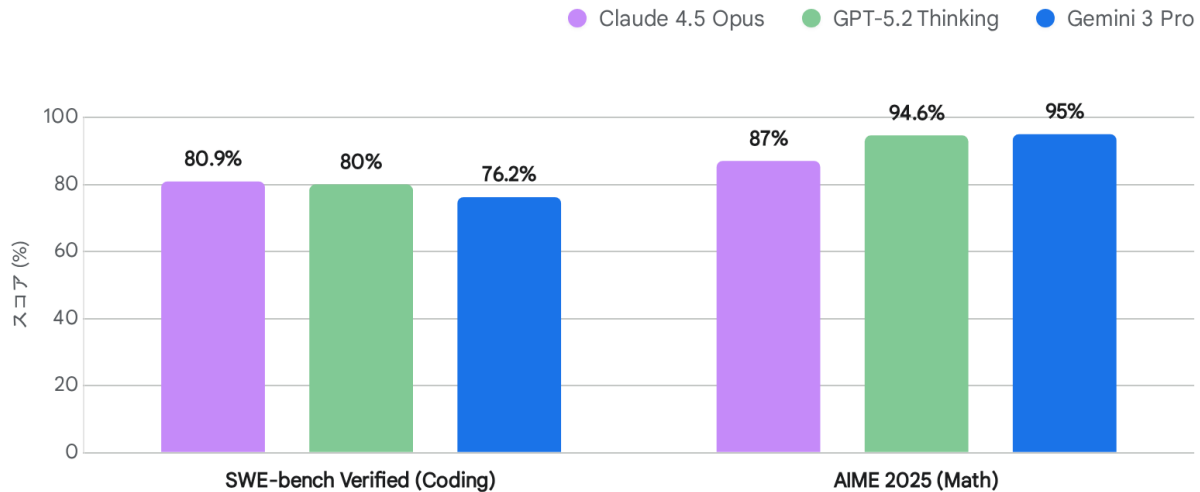
- **Gemini 3 Pro (Google) :**

- **最大の特徴:**「圧倒的なコンテキスト長と数学能力」。100 万トークンを超えるコンテキストウィンドウを持ち、書籍数百冊分や大規模なコードベースを一度に読み込むことができる。
- **得意領域:** 数学・科学研究（AIME 2025 で 95.0% の正答率）、マルチモーダル分析。特に「Deep Think」モード時の数学的推論能力は他を圧倒しており、学術用途やデータサイエンス分野で最強の地位を築いている<sup>17</sup>。
- **位置づけ:** Google エコシステム（Workspace, Android）との統合が進んでおり、大規模データを扱う業務に最適。

- **Claude 4.5 Opus (Anthropic) :**

- **最大の特徴:**「コーディングと長期的タスクの安定性」。開発者コミュニティからの支持が最も厚く、特にコーディング能力においては SWE-bench で 80.9% という最高スコアを叩き出し、GPT-5.2 を僅差で上回った<sup>18</sup>。
- **得意領域:** 複雑なシステムのリファクタリング、長時間の自律エージェント運用、ミッションクリティカルなタスク。ハルシネーション（嘘）の発生率が低く、「分からないことは分からない」と言う誠実さが評価されている。
- **位置づけ:** プログラマーやエンジニアにとっての「最高のペアプログラマー」。

## 2025年フロンティアモデル性能比較：コーディング vs 数学推論



SWE-bench Verified（実世界ソフトウェアエンジニアリング）とAIME 2025（数学競技）における各モデルのスコア比較。Claude 4.5 Opusがコーディングでわずかにリードする一方、Gemini 3 Proは数学・科学領域で圧倒的な強さを見せる。

Data sources: [Passionfruit Blog](#), [Vertu](#), [DeepSeek Paper](#)

### 3.3 コンテキストウィンドウ戦争と RAG の変容

2025 年のもう一つの重要な技術トレンドは、RAG（検索拡張生成）の役割の変化である。これまで、LLM の入力文字数制限（コンテキストウィンドウ）には限界があったため、膨大な社内ドキュメントの中から関連する部分だけを検索して AI に与える RAG という手法が必須であった。

しかし、Gemini 3 Pro が 100 万トークン以上のコンテキストを実現し、GPT-5.2 が「Compaction（圧縮）」技術を導入したことで、状況は一変した<sup>17</sup>。ユーザーは、プロジェクトに関連する数百の PDF ファイルや全ソースコードをそのままプロンプトに放り込み、「この中から矛盾点を洗い出せ」といった指示を出すことが可能になった。これにより、情報の断片化による精度の低下を防ぎ、AI が全体像（Global Context）を把握した上での推論が可能になった。RAG は消滅するわけではないが、その役割は「必須の回避策」から「コスト最適化のためのオプション」へと変化しつつある。

---

## 4. トピック 3：「検索」の終焉と「Deep Research」の



# 台頭

## 4.1 "ググる"から"リサーチさせる"へのパラダイムシフト

いけとも **ch** が「最強の時短術」として紹介するであろうトピックの一つが、情報収集プロセスの劇的な変化である。2025 年、私たちは「検索（Search）」の時代から「リサーチ（Research）」の時代へと移行した。

従来の検索エンジン（Google 検索など）は、ユーザーがキーワードを入力し、表示されたリンクを一つずつクリックし、中身を読み、情報を脳内で統合するという、人間側に多大な認知的負荷を強いるシステムであった。しかし、OpenAI の「Deep Research」や Perplexity の機能拡張は、このプロセスを AI エージェントが代行する形へと完全に書き換えた<sup>20</sup>。

## 4.2 OpenAI 「Deep Research」 エージェントの衝撃

OpenAI が 2025 年 2 月にリリースした「Deep Research」は、その名の通り「深い調査」を行う自律型エージェントである<sup>21</sup>。ユーザーが「2025 年の電気自動車市場の動向と主要プレイヤーの戦略をまとめて」と指示するだけで、このエージェントは以下の行動を自律的に行う：

1. **計画立案**: 調査に必要なサブトピック（市場規模、規制、技術トレンドなど）を分解する。
2. **多角的検索**: 複数の検索クエリを発行し、ウェブサイト、PDF レポート、ニュース記事を巡回する。
3. **情報の精査と統合**: 見つけた情報の信頼性を評価し、矛盾する情報を整理する。
4. **レポート作成**: 引用元を明記した数千文字に及ぶ詳細なレポートを出力する。

このプロセスには 5 分から 30 分程度の時間がかかるが、人間が数時間から数日かけて行う作業を代替するものである。ベンチマークテスト「Humanity's Last Exam」において、Deep Research は 26.6%というスコアを記録した。これは、従来の GPT-4o（3.3%）や DeepSeek R1（9.4%）と比較して圧倒的な情報収集・統合能力を示している<sup>21</sup>。

## 4.3 Perplexity と「ゼロクリック」時代の到来

「AI 検索エンジン」として地位を確立した Perplexity もまた、Deep Research 機能を強化し、リアルタイムのウェブ情報と高度な推論を組み合わせた回答を提供している<sup>22</sup>。これにより、ナレッジワーカーの業務フローは劇的に効率化された。マーケティング担当者は競合調査を、研究者は先行研究のサーベイを、AI に「委任」できるようになったのである。

しかし、この利便性の裏には、ウェブエコシステムへの深刻な影響が存在する。ユーザーが AI の作成した要約だけで満足し、元のウェブサイトを訪問しなくなる「ゼロクリック検索」が常態化している。コンテンツ制作者へのトラフィック還元が激減し、SEO（検索エンジン最適化）は GEO（生成 AI 最適化：AI にいかに引用されるか）へとその本質を変化させている<sup>24</sup>。

---

## 5. トピック 4 : Vibe Coding —プログラミングの民主化と変質

### 5.1 "Vibe Coding"（バイブ・コーディング）とは何か

2025 年 2 月、元 OpenAI の研究者であり Tesla の AI 責任者でもあった Andrej Karpathy 氏が提唱した「Vibe Coding（バイブ・コーディング）」という言葉は、瞬く間に開発者コミュニティの流行語となり、そして 2025 年を通じて標準的な開発スタイルとして定着した<sup>25</sup>。

Vibe Coding とは、一言で言えば「バイブス（雰囲気・直感）でコードを書く」手法である。開発者はもはや、プログラミング言語の厳密な構文（Syntax）やライブラリの詳細を記憶する必要はない。自然言語で「こういう機能が欲しい」「もっとカッコよくして」「ここを直して」といった、人間同士の会話のような曖昧な指示（Vibe）を AI に投げかけるだけでよい。AI（LLM）はその意図を汲み取り、正確なコードを生成し、実行し、エラーが出れば自律的に修正する。Karpathy 氏はこれを「コードが存在することさえ忘れて、指数関数的な生産性を享受する」状態と表現した<sup>26</sup>。

### 5.2 開発ツールの進化 : Cursor と Windsurf

このスタイルを支えたのが、「Cursor」や「Windsurf」といった AI ネイティブなコードエディタ（IDE）の台頭である<sup>28</sup>。従来の VS Code に Copilot プラグインを入れるだけの環境とは異なり、これらのツールはエディタ全体が AI と統合されている。

- **文脈認識:** プロジェクト内の全ファイルを AI が把握しており、「この関数の仕様を変えて」と言えば、依存関係にある他のファイルも自動的に修正する。
- **ターミナル操作:** AI が自分でコマンドラインを操作し、ライブラリのインストールやサーバーの起動を行う。
- **自律デバッグ:** エラーログを読み取り、原因を特定し、修正案を提示するまでの一連の流れを自動化する。

これにより、いけとも氏の主な視聴者層である「非エンジニアのビジネスパーソン」であっても、社内用の業務効率化ツールやデータ分析ダッシュボード、簡単な Web アプリを自作できるようになった。これは「プログラミングの民主化」の最終形態とも言える。

### 5.3 Vibe Coding の影 : 技術的負債とセキュリティ

一方で、Vibe Coding は「中身を理解せずに動くコード」を大量生産するリスクも孕んでいる。SonarQube などの品質管理ツールベンダーは、AI 生成コードによる「技術的負債」の増大を警告している<sup>28</sup>。



- **セキュリティ脆弱性:** AI は機能要件を満たすコードを書くのは得意だが、セキュリティ要件（SQL インジェクション対策など）を無視する場合がある。
- **保守性の低下:** 人間が理解できない複雑なコードが生成され、後から修正が困難になる（ブラックボックス化）。
- **責任の所在:** バグによって損害が発生した場合、コードを書いた AI には責任を取れない。

2026 年に向けては、AI が書いたコードを人間がレビューするのではなく、AI が書いたコードを別の「監査 AI」がレビューする体制、いわゆる「AI による AI の監視」が必要となると予想される。

---

## 6. トピック 5：マルチモーダルと「Nano Banana」現象 — AI 文化の醸成

### 6.1 視覚・聴覚への拡張

2025 年は、AI が「目」と「耳」を完全に獲得した年でもある。GPT-5.2 や Gemini 3 Pro は、テキストだけでなく画像、音声、動画をネイティブに理解し、生成することができる。特に OpenAI の「Sora 2」や Google の「Veo」といった動画生成 AI は、映像制作のコスト構造を破壊し、個人クリエイターがハリウッド級の映像を作り出すことを可能にした<sup>30</sup>。

### 6.2 ケーススタディ：「Nano Banana」現象

2025 年 8 月に発生した「Nano Banana（ナノバナナ）」現象は、AI 技術の受容における興味深い、そして象徴的な事例である<sup>31</sup>。

事の発端は、AI モデルの比較サイト「LMArena」に突如現れた「Nano Banana」という謎のモデルであった。開発元不明のこのモデルは、画像編集タスクにおいて既存のモデルを圧倒するスコアを叩き出し、特に「人物のフィギュア化」や「画像の自然な加工」において驚異的な性能を見せた。

SNS 上では「Google の極秘モデルの流出だ」「いや、新興企業のジョークだ」と憶測が飛び交い、ユーザーが自分の写真をフィギュア風に加工してアップロードする「Nano Banana チャレンジ」が世界的なミームとなった。

後に Google は、これが開発中の「Gemini 2.5 Flash Image」モデルのコードネームであったことを認め、正式リリースを行った<sup>31</sup>。この騒動は以下の教訓を残した：

1. **性能よりも「物語」と「遊び心」:** 技術的なスペックよりも、ミステリアスな物語やキャッチーな名前（バナナ）が、AI 技術の大衆化（バイラル）を加速させる。Google のような巨大テック企業も、この「ミーム文化」をマーケティングに取り入れざるを得なくなった。

2. **情報の錯綜:** 一時、「Nano Banana は実在しない」「ジョークである」という情報も拡散したが<sup>35</sup>、実際には実在する技術のコードネームであった。AI 情報は日々錯綜しており、何が真実で何がフェイクかを見極めるリテラシーが求められる。
3. **ユーザー主導のユースケース:** Google が想定していなかった「フィギュア化」という使い方が、ユーザーの遊び心によって発見され、キラーコンテンツとなった。

---

## 7. トピック 6：物理世界への進出 — Physical AI

### 7.1 「画面の中」から「現実世界」へ

これまでの AI は主にデジタル空間（テキスト、画像、コード）で価値を発揮してきたが、2025 年後半から 2026 年にかけての大きな潮流は「Physical AI（物理 AI）」である。Gartner はこれを 2026 年のトップ戦略トレンドの一つに挙げている<sup>2</sup>。

Physical AI とは、ロボット、ドローン、自動運転車、スマートファクトリーのセンサーなど、物理世界と直接相互作用する AI システムを指す。NVIDIA の Project GR00T などの人型ロボット基盤モデルの登場により、ロボットは事前にプログラムされた動きを繰り返すだけでなく、自然言語の指示を理解し、未知の環境で自律的にタスクをこなすことが可能になりつつある。

### 7.2 労働力不足への直接解

日本のような少子高齢化社会において、Physical AI は物流、介護、建設といった「人手不足」が深刻な現場への直接的な解決策として期待されている。いけとも ch の視聴者であるビジネス層にとっても、これは遠い未来の話ではなく、倉庫の自動化や店舗の無人化といった形で、直近のビジネス課題に関わるトピックとなる。

---

## 8. トピック 7：インフラとコストの壁 — AI を持続可能にするために

### 8.1 10 億エージェントを支えるエネルギー

最後のトピックは、これら全ての AI 進化を支える「物理的基盤」の問題である。SoftBank の孫正義氏が掲げる「10 億エージェント構想」や、OpenAI の AGI 開発は、莫大な計算資源と電力を必要とする<sup>13</sup>。

2025 年、データセンターの電力消費量は急増し、電力網への負荷が社会問題化した。AI の進化は「モデルをいかに賢くするか」という競争から、「いかに安く、省電力で動かすか」という「推論効率」の競争へとシフトしている。

## 8.2 DeepSeek ショックとコスト革命

この文脈で重要なのが、中国の DeepSeek などのオープンソース/オープンウェイトモデルの台頭である。彼らは極めて低いコストで GPT-4 クラスの性能を実現し、AI の推論コストを劇的に引き下げた<sup>19</sup>。これにより、「AI を使うたびにお金がかかる」という心理的ハードルが下がり、個人や中小企業でも AI エージェントを常時稼働させることが経済的に合理的になった。

---

## 9. いけとも Ch 動画の評価と総括

### 9.1 評価すべき点 (Strengths )

いけとも氏の解説は、以下の点において高く評価できる。

- 徹底した「実用」視点: 技術的なベンチマーク (MMLU スコアの小数点以下の差など) に拘泥せず、「Deep Research で調査時間をどう短縮するか」「Vibe Coding で非エンジニアがどう開発するか」という、ビジネスパーソンの「明日からの仕事」に直結する視点で語られている。
- トレンドの網羅と構造化: 2025 年の複雑な AI ニュースを、エージェント、検索、コーディング、文化といった理解しやすいトピックに整理し、視聴者に全体像を提示している。
- 難解な技術の翻訳: MCP やエージェントイック AI といった専門的な概念を、噛み砕いて解説することで、技術リテラシーの高くない層にも AI の進化を自分事として捉えさせている。

### 9.2 問題が見られる点・懸念点 (Critical Analysis )

一方で、以下の点には注意が必要である。

- リスクへの言及不足の可能性: 「10 億エージェント」や「完全自動化」といったベンダーのバラ色の未来予測をそのまま伝えるだけでなく、それに伴うセキュリティリスク (Shadow AI、データ漏洩) や、AI に過度に依存することによる人間のスキル低下 (Thinking atrophy) への警鐘も必要である<sup>2</sup>。
- 情報の正確性とニュアンス: 特に「Nano Banana」のようなネットミーム由来の情報を扱う際、それが正式な製品名なのか、コードネームなのか、コミュニティのジョークなのかという背景を正確に伝えないと、視聴者の誤解を招く恐れがある。
- 「AI 万能論」への傾倒: AI は確かに進化したとはいえ、依然としてハルシネーションを起こし、常識的な判断ミスを犯す。ビジネス現場では「AI を信じすぎない」姿勢も重要であり、そのバランス感覚が求められる。

---

## 10. 2026 年の展望 —ハイプを超えて「信頼」の時代へ

## 10.1 ガートナー・フォレスター予測に見る 2026 年

2026 年はどうなる年になるのか。主要な調査機関の予測を統合すると、一つの共通項が見えてくる。それは「ハイプ（熱狂）の終わりと、リアリズム（現実）の始まり」である。

- **Forrester** の予測: 2026 年は「AI の採点 (Reckoning)」の年になる。AI への過剰な期待が剥落し、企業は具体的な ROI（投資対効果）を厳しく問うようになる。また、「AI フリー (Human-only)」の体験がプレミアムな価値として再評価される動きが出てくる<sup>37</sup>。
- **Gartner** の予測: 「AI セキュリティプラットフォーム」や「デジタル来歴 (Digital Provenance)」が必須となる。AI が生成したコンテンツやコードの出所を証明し、改ざんを防ぐ技術が社会インフラとして定着する<sup>2</sup>。

## 10.2 日本企業と個人の戦略

2026 年に向けて、日本企業と個人は以下の戦略を取るべきである。

1. 「同僚」としての AI 受容: エージェント AI を単なるツールではなく、マネジメント対象（部下）として捉え、適切な目標設定と評価を行うスキルを身につける。
2. **Vibe Coding** の習得: プログラミングを「エンジニアの専門技能」から「ビジネスパーソンの基礎教養」へと再定義し、自らの業務ツールを自作する文化を作る。
3. 「人間性」への回帰: AI が論理的推論や実務を代行するからこそ、人間にしかできない「共感」「倫理的判断」「責任を取る覚悟」の価値が相対的に高まる。

2025 年は AI が「社会」に入り込んだ年であった。2026 年は、人間がその AI とどう「共生」し、どう「主導権」を握り続けるかが問われる年となるだろう。

## 引用文献

1. The state of AI in 2025: Agents, innovation, and transformation, 12 月 26, 2025 にアクセス、<https://www.mckinsey.com/capabilities/quantumblack/our-insights/the-state-of-ai>
2. Gartner just dropped its 2026 tech trends - and it's not all AI- ZDNET, 12月 26, 2025 にアクセス、<https://www.zdnet.com/article/gartner-just-dropped-its-2026-tech-trends-and-its-not-all-ai-heres-the-list/>
3. AI×Web マーケティングの最前線 ~AI を使いこなして、成果を動かせ~, 12月 26, 2025 にアクセス、[https://bruceclay.jpn.com/conference\\_251201/?bq\\_user\\_custom\\_field\\_546=bcj](https://bruceclay.jpn.com/conference_251201/?bq_user_custom_field_546=bcj)
4. Manus ワイドリサーチの実力検証！50 社並列調査で分かった効率性 ..., 12月 26, 2025 にアクセス、<https://gai.workstyle-evolution.co.jp/2025/08/07/manus-wide-research-parallel-investigation-efficiency-cost-analysis/>
5. Wipro CTO Sandhya Arun outlines key technology trends set to shape enterprises in 2026, 12 月 26, 2025 にアクセス、<https://timesofindia.indiatimes.com/technology/tech-news/wipro-cto-sandhya->

[arun-outlines-key-technology-trends-set-to-shape-enterprises-in-2026/articleshow/126126643.cms](https://arun-outlines-key-technology-trends-set-to-shape-enterprises-in-2026/articleshow/126126643.cms)

6. ModelContext Protocol- Wikipedia, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
[https://en.wikipedia.org/wiki/Model\\_Context\\_Protocol](https://en.wikipedia.org/wiki/Model_Context_Protocol)
7. Introducing the ModelContext Protocol- Anthropic, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
<https://www.anthropic.com/news/model-context-protocol>
8. 7 Things to Know About MCP (ModelContext Protocol) in 2025, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
<https://www.adskate.com/blogs/mcp-model-context-protocol-2025-guide>
9. ModelContext Protocol (MCP): A New Standard For AI Integration, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
<https://xite.ai/blogs/model-context-protocol-mcp-a-new-standard-for-ai-integration/>
10. The Great B2B Bifurcation of 2025: Why Some SaaS Stocks Are Up ..., 12 月 26, 2025 にアクセス、  
<https://www.saastr.com/the-performing-major-b2b-stocks-of-2025-what-the-ai-divide-tells-us-about-the-future-of-saas/>
11. Salesforce Stock: Agentforce is Gaining Momentum - Leverage Shares, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
<https://leverageshares.com/us/insights/salesforce-stock-agentforce-is-gaining-momentum/>
12. AI Adoption Skyrockets 282% as CIOs Enter the Era of Scale, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
<https://www.salesforce.com/news/stories/cio-trends-2026/>
13. 1 Billion AI Agents by 2026 - Dennis Alexander Morozov, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
<https://dennisalexandermorozov.medium.com/1-billion-ai-agents-by-2026-e18c1f670329>
14. SoftBank aims for 1 billion AI agents this year - Light Reading, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
<https://www.lightreading.com/ai-machine-learning/softbank-aims-for-1-billion-ai-agents-this-year>
15. The ModelContext Protocol's impact on 2025 - Thoughtworks, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
<https://www.thoughtworks.com/en-gb/insights/blog/generative-ai/model-context-protocol-mcp-impact-2025>
16. Gartner 2026 Technology Trends – Win The Next Tech Wave - Prolifics, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
<https://prolifics.com/usa/resource-center/blog/gartner-2026-technology-trends>
17. GPT 5.1 vs Claude 4.5 vs Gemini 3: 2025 AI Comparison, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
<https://www.getpassionfruit.com/blog/gpt-5-1-vs-claude-4-5-sonnet-vs-gemini-3-pro-vs-deepseek-v3-2-the-definitive-2025-ai-model-comparison>
18. AICoding Battle 2025: Claude 4.5, GPT-5.2 & Gemini 3 Pro ... - Vertu, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
<https://vertu.com/lifestyle/gpt-5-2-codex-vs-gemini-3-pro-vs-claude-4-5-ai-coding-model-comparison/>
19. DeepSeek-V3.2: Pushing the Frontier of Open Large Language ..., 12 月 26, 2025 にアクセス、  
<https://modelscope.cn/models/deepseek-ai/DeepSeek-V3.2/resolve/master/assets/paper.pdf>
20. Replicating Deep Research in Jan - Jan.ai, 12 月 26, 2025 にアクセス、

<https://www.jan.ai/post/deepresearch>

21. ChatGPT Deep Research - Wikipedia, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
[https://en.wikipedia.org/wiki/ChatGPT\\_Deep\\_Research](https://en.wikipedia.org/wiki/ChatGPT_Deep_Research)
22. Perplexity Deep Research Explained: Features & Comparisons, 12 月 26, 2025 に  
アクセス、<https://abcbootcamps.com/perplexity-deep-research-explained-features-comparisons/>
23. OpenAI Expands Access to Deep Research - HPCwire, 12 月 26, 2025 にアクセ  
ス、<https://www.hpcwire.com/2025/03/02/openai-expands-access-to-deep-research/>
24. Generative AI makes PR a key business priority in 2026, 12 月 26, 2025 にアクセ  
ス、<https://www.swordandthescript.com/2025/12/predictions-generative-ai-makes-pr-a-priority/>
25. 12 月 26, 2025 にアクセス、<https://cloud.google.com/discover/what-is-vibe-coding#:~:text=The%20term%2C%20coined%20by%20AI,through%20a%20mor,e%20conversational%20process.>
26. Vibe coding - Wikipedia, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
[https://en.wikipedia.org/wiki/Vibe\\_coding](https://en.wikipedia.org/wiki/Vibe_coding)
27. What is vibe coding? | AICoding - Cloudflare, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
<https://www.cloudflare.com/learning/ai/ai-vibe-coding/>
28. What is Vibe Coding? Prompting AI Software Development | Sonar, 12 月 26, 2025  
にアクセス、<https://www.sonarsource.com/resources/library/vibe-coding/>
29. What is Vibe Coding? AI-Powered Development - Decube, 12 月 26, 2025 にアク  
セス、<https://www.decube.io/post/vibe-coding-ai>
30. Top AI news of 2025: Biggest announcements that defined the year, 12 月 26,  
2025 にアクセス、<https://www.businesstoday.in/technology/news/story/top-ai-news-of-2025-biggest-announcements-that-defined-the-year-507678-2025-12-22>
31. Nano Banana - Wikipedia, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
[https://en.wikipedia.org/wiki/Nano\\_Banana](https://en.wikipedia.org/wiki/Nano_Banana)
32. Google Nano Banana: Complete Guide + 50 Prompts + ..., 12 月 26, 2025 にアク  
セス、<https://superprompt.com/blog/google-nano-banana-ai-image-generation-complete-guide>
33. Nano Banana Trend: Harmless Meme or Glimpse into AI-Saturated ..., 12 月 26,  
2025 にアクセス、<https://techachievemedia.com/future-technology-news/nano-banana-trend-harmless-meme-glimpse-into-ai-saturated-future/>
34. Why Is It Called “Nano Banana”? - GlobalGPT, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
<https://www.glbgt.com/hub/why-is-it-called-nano-banana/>
35. Google Nano Banana - Best AI, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
<https://yugenderan.com/google-nano-banana-best-ai/>
36. AI Trends 2025: Top 10 Predictions, 12 月 26, 2025 にアクセス、  
<https://uslab.ai/en/blog/2025-state-of-ai-report>
37. Predictions 2026: The Race To Trust And Value - Forrester, 12 月 26, 2025 にアク



セス、 <https://www.forrester.com/predictions/>

38. 18 Customer experience predictions for 2026 | Adrian Swinscoe, 12 月 26, 2025

にアクセス、 <https://www.adrianswinscoe.com/2025/12/18-customer-experience-predictions-for-2026/>